

水状態で管理した。開花した株は樹高80cm、頂芽付近に3個の蕾を付け、そのうちの1花が1997年11月13日に開花した。葉腋から約1.5cmの花柄を伸ばし、長さ3cm、花径2.5cmの花が下向きに咲いた。10花弁、10萼片をもち、外側は赤～淡紅色を呈する。花弁はクリーム～オレンジ色で、内側の縁には毛がある。葯は1花弁に対し2本有り、鞘状になった花弁が開くと同時にその中に覆われていた葯がはじけ、花粉を飛ばす。1花の寿命は18日であった。



オヒルギの花

ダーリングトニアの開花について (*Darlingtonia californica* Torr.)

原田 尋美

本種はサラセニア科に属し、1属1種の多年生の食虫植物で、アメリカ合衆国のカリフォルニア州北部とオレゴン州西部にのみ自生している。自生地は低地から標高2,800mにかけての傾斜地に点在する湿地で、多量の湧水によって地温が1年中低く保たれている。このため夏の暑さを嫌い、日本での栽培は難しい。別名コブラプラントとも呼ばれるとおり、ヘビが鎌首をもたげたような形をしている。自生地では捕虫葉の長さが1mにもなるが、栽培品では30～40cm程度である。当園では、夏期15～20℃、冬期13～25℃に室温を調節し、50%程度遮光したガラス温室内で6株栽培している。これまでも花芽が確認されたことはあるが、開花に至らなかった。今回初めて開花し、花の細部を観察できたので記録する。

開花した株は、20cm×30cmの発泡スチロール箱に水苔で植え付けたもので、捕虫葉の長さは25～30cm、現在当園で栽培しているなかで最も大きな株であった。花茎を伸ばしたのは1997年4月で、5月20日ごろ開花した。6月2日に受粉を試みたが、花粉を確認することはできず、その後結実することもなかった。

花茎の長さは約55cm、一花を頂生した。花は

下向きに開き、直径約4cm。萼片は5枚、長さは約2.5cmでやや緑がかった黄色。花弁は5枚で長さ約1.5cm、濃い赤茶色で黒っぽい縞が入っている。花弁はほとんど開かず花柱を包んでいた。

同科のサラセニア属では花柱が傘のような独特の形状をしている(図1)が、ダーリングトニアではそのような特徴的な構造は見られなかった(図2)。

開花後も順調に生育を続け、1997年11月上旬には、花芽と思われる5cm程度の新芽が確認されている。来春の開花をめざして観察を続けたい。

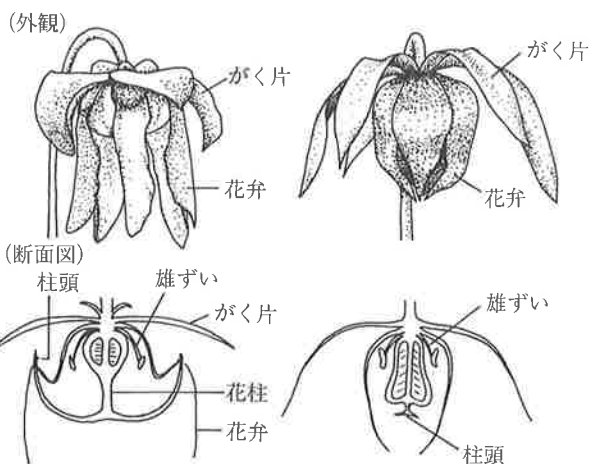


図1 サラセニア・フラバの花 図2 ダーリングトニアの花